



令和3年度

鹿児島県の教育

10月号

巻頭言



永遠の新人たれ

一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副部長

鹿児島市立伊敷台中学校長
平 田 和 利

私たちは、日々の生活や仕事の中で、忙しさ等にかまけて新鮮で謙虚な気持ちや志の一つの間に忘れてしまっていないだろうか。また、リーダーに欠かせない条件の一つに「自信」というものがあるが、物事がうまくいき、慣れてくると、無意識に己の価値や力量などを實際よりも高く見積もってしまう。そして、往々にして「自信」から「過信」に流されることがある。さらに「過信」から「慢心」、「放漫」に化けることはないだろうか。

そんなことを考えていると、自身の新任教員等研修会で、当時県教育長だった故濱里先生の「私が第一声として皆さんに申し上げたいことは、『永遠の新人たれ』ということであり、幾つになっても、今の新しい教育への情熱、その新鮮な気持ちを見失わないでほしいということであり、」という教えが蘇ってくる。

また、世阿弥の「花伝書」の中での、「申楽についての一般を修め、舞台に立って演ずる自分を、さも芸道を極めたかのように考え、大成した名人のような風体をするのは浅ましいことである。たとえ周りの人から褒められたいとしても、それを一時の花だと悟って、一層稽古に励むべきである。その一時の花を真の花と誤解すると、そのような花はすぐに失

せてしまうものである。」という、もう一つの教えが脳裏に浮かんでくる。

ところで、人が「成長したい時」「チャレンジ精神を奮起させたい時」「仕事を成功させたい時」「有意義な生活を送りたい時」など、判断基準として、これまでの偉人が残した普遍的な価値をもつ名言に惹かれる。人の心を引きつけてやまない言葉が自分の精神とつながり、過去から現在、そして未来へと続く人生について仕事について、様々な形で指標となり、自分の心を支えてくれる一生の宝物となる。

現在私は、毎朝、生徒玄関や職員玄関等の掃除を行っている。そして、正門から桜島を眺め思いを馳せながらの階段掃除。やがて生徒が登校し、「おはようございます。」「元氣そうだね。」と声を掛け合う。これが私の一日の始まりであり、初任時代と重なる。そして、その頃の自分と対話している今の自分がいる。

私たちは、教育に携わる者として、その動機の源泉に立ち返り、その動機と自分の個性が今の仕事や職場環境で生かされているかどうか振り返る必要がある。源泉は、日々のルーティンワークの中で埋没していきがちだからだ。

あえて今、教師の道を選んだ動機の源泉に立ち返り、「何ができたか」を問うてみてはどうだろうか。

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

令和3(2021)年 10月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844



親の思い 教師の戸惑い

伊佐市教育委員会社会教育課
家庭教育専門指導員 内倉 昭夫

略歴

一九七五年 鹿児島大学教育学部卒業
一九七五年から 鹿児島市立原良小学校他十校勤務
二〇一〇年 退職
二〇一三年から 現職

七十過ぎたら「おつりの人生」。人生はすべて人のおかげで成り立っている、と思えるようになるのが加齢した人の特徴だ。だから、人は、ある程度齢を重ねたら、今まで支えてもらった人や物に対して、何か自分が恩返しできることはないかと考える、という話を敬老会で聞いた。

おつりの人生に入った私は「人生の目的とは何だろう。」「人のために何ができるのか。」「いや、自分の人生こんなもんだ。このままでいい。」等、いろいろ考えた。しかし、答えが見つからないまま時は過ぎていった。

私は伊佐市教育委員会家庭教育専門指導員として、親の育ちを応援する家庭教育学級を推進している。学習後の感想に、「子どもが大人になった時、『私は親に愛された。』『私は大事な存在だった。』と思うだろうか。ただただそれを目標に子どもと向き合い、自分を見つめ、反省と後悔を繰り返す毎日。落ち込む日も子ども笑顔が目標達成への活力です。」「子どもが辛そうに話をしてくる。少しでも役に立てればとアドバイスのもりでも語りかけた。すると、子どもから返ってきた言葉は『そんなこと聞きたいんじゃない。黙って聞いてほしいだけ。』と聞き上手の私になろうと思った。」など、学級

生の子育てに対する熱意を感じる文がある。私は、親の育ちを応援したい気持ちがある以上、湧いてくる。やつと「おつりの人生」に一步踏み込んだような気がしてきた。

ところで、今の学校は、不登校、学力低下、いじめ、ネット非行など、さまざまな問題を抱えている。このような事態を憂慮し、その要因はどこにあるのか、という議論も活発で、家庭教育力の低下、地域の教育力の低下などが話題に上がる。しかし、学校の教育力の低下という言葉はあまり耳にしない。子育てに一生懸命な学級生を見ていると、学校の教育力の低下も大きな要因ではないかと考えてしまう。

私は学級生の熱心に学ぶ姿を見るたびに、教師駆け出しのころの信頼関係を築けなかった苦い経験を思い出す。

「先生、僕は百点を取ったのに。どうしてまた同じテストをするのですか。」
「君はよく頑張った勉強をしたんだね。クラスで一人だけ百点だった。でも、もう一回テストをしてまた百点だったらこの内容は完璧だよな。」

こんなやり取りだった。ほとんどの児童が理

解不足だったため、再指導、再テストをすることにした。子どもと保護者の嬉しき、喜び、努力などより自分の指導力不足を優先してしまつた。教師は教育について「こうありたい。」「こうでなくてはならない。」という教育の専門家としての信念がある。保護者は自分の子育てについて信念を持っている。両者の考えの融合は難しく、悩む日が続いた。

ある日、先輩教師が「どんなに世の中が進歩しても教育は所詮、人がするものであり、教える者と教わる者との好ましい関係がなければ成果を上げることができない。教育に心を通わせることが大事なんだ。」と話してくれた。先輩教師から贈られた言葉をかみしめながら日々の教育に努めた。時間はかかったが、子どもたちの「先生は自分を大事にしてくれる。」「先生の授業はやる気になる。」などという教師を信頼する声を通して、保護者は学校の様子とともに教師に信頼を置く、という答えを導き出した。自分の進むべき教育の姿が描けたような気がした。

四十七年前、保護者が書いた授業参観後の感想は『私のあふれる思いの記憶』でもある。

「先生の話を傾けている息子。先生の質問に答えている息子。グループ討議をしている息子。熱心にノートをとる息子。私は離れたところから見ていてドキドキする。私は、ただただ息子が眩しい。」



「微笑」と「言霊」

「言葉に想いを込める」

粟ヶ窪小(南) 下川床 光 浩

一 微笑

「日本人の微笑は、念入りにつくられ、長いあいだに洗練された作法なのである。それはまた、沈黙の言語でもある。」

(小泉八雲「日本人の微笑」)

穏やかさの中に威厳があり、微笑一つで、子どもや職員を前向きな気持ちにさせることができる。そんな先輩がいらっちゃった。

はるか昔、指導を仰いだその方の微笑が忘れられない。職務に関しては、妥協を一切許さない厳しさがあつた。交流研修の中学校で、教務という重責を担った私に、校務の基本を微に入り細に入り徹底して指導してください。正直投げ出したこともあつた。今考えるとよく付いてくれたなとしみじみ思う。ただ、感情的な言葉での叱責は絶対にされない方であつた。

直接の指導も終わるといふ日、その方が、「よう頑張ったなあ。」

と、何とも言えない微笑を浮かべながら一言だけおっしゃつた。言葉に被さるような表情が心にしみた。全ての苦勞が昇華した瞬間だつた。

今となつては、後に続く言葉は分からない。

ただその微笑は、今でも私の真ん中にある。それとは真逆の想いもある。認知(頭)では理解していても情意(心)が強く反応し、未だ消化できない未成熟な想いとして残っている。

沈黙の言語「微笑」に込められた想いは、いつまでも消えない輝きを放つものである。

二 言霊

「言霊」とは、発した言葉が音としてだけでなく魂をもち、それがきっかけで現実には何らかの影響を与えるという考えである。

言葉は、相手がどう受け止めるか熟慮したうえで発せられるものであり、想いを込めることで魂が宿る。日本では古来これを信仰する向きもあり、宗教的要素や言論の自由への配慮も含め、一概には論じられないことも承知の上で、本稿を進める。

では、我々教師にとって「言霊」とはどういう意味を持つであろうか。

教師は、人を育てる責があるが故に最大限言葉に責任を持たねばならない。教師の発する一言一言が、子どもの成長のエネルギーにもなり成長を妨げる道具にもなる。教師の言葉には魂がこもっていなければならない。

昨今、感情的な言葉による「体罰」や「職場におけるハラズメント」の事例を見聞きする。自らの感情だけに依る激しい言葉を相手にぶつける。明らかな暴言ではなくとも、何気ない言葉でさえ苦痛を与えることにもなり得る。

自らの発した言葉が言霊となり、子どもや共に教育者として志を同じくする者の人生を左右しかねない力を持つてあるうことを、我々は十二分に自覚する必要がある。

特に校長は、その範疇が限りなく広がり、子ども、教職員、保護者を始め地域の方々、行政関係者など、学校に関わる全ての人に對して自らの言葉に魂を込める必要がある。

自分がそういう立場、後進を育てる立場となつた今、一言一言に「魂(想い)」がこもっているか。呼吸を整えることなく感情だけで言葉を発していないか。向き合うその人を尊重しているか。自問自答しながらの毎日である。

三 「言霊」を超越した「微笑」

校長として言霊を意識し、先の先輩のようにそれを超越した微笑を持ちたいものである。

がしかし、自分にはそのような境地に達する資質もなく、時間も残されていない。ただ言葉に「魂(想い)」を込めることのできる後進を育てるチャンスと時間は、まだある。

思いを新たに、校長の責として今しばらくは「言霊」を超越した「微笑」を備えたあの先輩の後ろ姿を追い続けることとする。



地域との連携による教育活動の推進

知根小(大) 中島 保男

一 はじめに

本校は、東シナ海に面し、山々に囲まれた自然豊かな環境にあり、学校と地域が連携し、地域の自然や文化・人材などの教育力を生かした様々な体験活動を推進している。校区は、学校を中心として東方と西方に一集落ずつの二集落、伝統を重んじ、愛郷心に富む教育熱心な気風があり、学校教育にも大変協力的である。

しかし、校区内の集落の過疎化、高齢化が進んでおり、地域の教育力の低下や伝統・文化の継承の難しさなどにより、貴重な学びや体験の機会が失われるのではないかと危惧している。このような状況の中で、学校と地域が連携した教育活動を一層進めることで、地域の絆が強まり、地域の教育力の向上と活性化につながるものと考ええる。

二 地域との連携による教育活動

地域の人材・素材の活用により、学びが広がり、より高い教育効果が期待できることから積極的に教育活動に取り入れている。

(一) 自然や伝統文化の体験活動

地域の自然や文化の理解を深めるための

体験学習を重視し、本物にふれ、感動を味わわせ、楽しさを体感させることで、豊かな感性を育むことができるようにしている。総合的な学習の時間における海に生息する生き物についての調べ学習やシーカヤックの体験学習は、土曜授業で実施し、ゲストティーチャーの地域の方々の協力を得やすいようにしている。

また、地域の方を講師に島唄や三味線などの伝統文化の体験も実施している。島唄や三味線にふれることで郷土の伝統文化に誇りを持つようになってきている。

さらに、地域の高齢者や婦人会の方々から習った八月踊りを運動会で披露して伝統文化の伝承を行っている。

このような活動を通して、地域の方々とふれ合うことにより、夢を持ち、人に興味を持ち、「生きる力」を育むことができる。また、地域の人たちは子どもたちから元気をもらい、生きがいにつながっているようである。

(二) 地域住民の学校行事への参加

運動会や学習発表会の学校行事には、地

域の方々にも参加してもらっている。運動会では、地域種目を入れ、地域と合同で開催し、学習発表会でも地域の舞台発表や作品の展示等を行い、地域と一体となった教育活動に取り組んでいる。

今年度は、新型コロナウイルス感染症対策を講じ、内容を工夫しながら実施方法を模索していきたい。

(三) 地域の方々によるボランティア活動

毎週水曜日は、地域の方による本の読み聞かせの日で、子どもたちはその読み聞かせを楽しみにしており、読書意欲の向上につながっている。また、毎朝二人のボランティアの方が、集落の子どもたちと一緒に学校まで歩いて安全指導を行っている。多くの大人たちの目で見守り、地域ぐるみで子どもを育ててもらっている。

三 地域との連携による特色ある教育活動

毎年、PTA主催の伝統行事として三年生以上の子どもたちが、一・三キロメートルを泳ぐ遠泳大会を行っている。保護者をはじめ卒業生、地域の方の伴泳や応援、救助船やシーカヤックによる見守りなど、多くの方々の協力を得て実施している。

四 おわりに

地域との連携を密にしながら教育活動を推進することは、地域住民の学校への関心が高まり、地域の活性化を図ることができる。

今後も地域の期待に応え、地域とともに歩む学校にしていきたい。

わが校の



学校経営



永水小マスコット
ながりん

みんなが主役

体験いっぱい永水小学校

永水小(始) 前田 博 王

一 はじめに

本校区は、霧島市の北東部に位置し、北に霧島火山群を仰ぎ、南は遠く錦江湾に浮かぶ桜島を望む絶景の地でもある。

校区は山間地にあり、農業が主産業で、野菜・いちごの栽培は有名であり、茶業も盛んである。

令和三年度は、児童数二十三人、完全複式三学級と特別支援学級二学級の計五学級でのスタートである。

二 学校経営の方針

本年度の学校教育目標は、「心豊かでたくましく、自ら学び夢を育む子供の育成」に設定し、キャッチフレーズを「みんなが主役体験いっぱい永水小学校」とした。また、学校経営の柱を次のように設定した。

- (一) 豊かな心の育成
- (二) 確かな学力の定着
- (三) 体力向上、保健・安全指導の充実
- (四) 特色ある教育活動の推進
- (五) 教職員の資質向上

三 特色ある教育活動

- (一) 山村留學制度と特認校制度

創立百周年を迎えた平成四年度に、地域の活性化と教育力向上を目指して、校区民と学校が連携し、県内で初めて山村留學里親制度を実施し、延べ百六十二人の留學生の受入れを行ってきた。しかし、校区の高齢化が進み里親希望者も減少し、現在では家族留學と孫戻し制度での継続を図っている。本年度は、家族留學の二人を受け入れ、また、平成十八年度より特認校制度も取り入れ、延べ百三十八人の受け入れを行い、本年度も四人の児童が在籍している。この制度を継続するための大きな役割を果たすが、ホームページとブログである。留學希望者のほとんどがインターネットで検索しての問い合わせである。今年度は、ホームページのリニューアルを進め、ブログについても週二回以上の更新を目標に情報発信を続けている。

- (二) 校区民と保護者を中心とした体験活動
永水校区の豊かな自然を生かした様々な教育活動に稲作体験、そば打ち体験がある。校区内の農業従事者に指導をお願いして、苗作りから田植え、稲刈りまで一貫した体

験活動を実施している。そば打ち体験も、校区女性団体の協力で実施している。

また、山村留學実行委員会とPTAが中心となり、夏季休業中を利用した親子での一泊二日の「山村キャンプ」や十一月には、校区内を歩きながら地元特産品を味わう「永水ぐるりグルメ歩こう会」などの体験活動も実施している。さらには「オータムコンサート」と名付けた芸術鑑賞会も実施している。これらの行事には、校区外にも広く参加を呼びかけ、永水校区の重要な行事となっている。

(三) ICT機器活用の推進

完全複式学級である本校では、ICT機器を活用した授業方法改善が重要な課題である。これまでも全学級で電子黒板やデジタル教科書の積極的な活用を進めてきたが、今年度は、GIGAスクール構想に伴うタブレット端末の活用にも力を入れている。解決した課題や取得した情報を、端末を通して情報共有することで、これまで以上に学習に深まりが見られるようになった。また、特別支援学級でも、個別の学習に端末を活用することで、学習効果の向上が見られる。今後も児童の情報活用能力の育成を計画的に進めていく。

四 おわりに

これまで本校は、小規模校ながら多くの校区民や保護者の協力でたくさんの活動を実施してきた。このことに感謝しながら、これからも地域の学校としての経営を進めていきたい。



自立に向かう生徒の育成

人・歴史・自然に学ぶ

犬田布中(大) 高瀬 茂

一 はじめに

闘牛と黒砂糖の島、徳之島の西部に位置し、海拔八十二メートルで海を見渡せる丘陵地帯に本校はある。今年度は生徒数五六人、全五学級でスタートした。平成二十三年二月に完成した石灰岩を活用したモダンな校舎、犬田布岬には戦艦大和の慰霊碑が建立されており、自然豊かで人情味溢れる恵まれた環境の下、地域社会の誇りとして信頼される学校を目指し、保護者や地域と連携した教育活動の充実に取り組んでいる。

二 生徒の実態と教育方針

生徒は、牛の世話、サトウキビやジャガイモの畑仕事など、家の手伝いをよくし、純朴で素直な生徒が多い。また、高校進学で約二割、高校卒業後は、ほとんどの生徒が親元を離れ、島を出る。

そこで、本校では人権教育(令和二年度混合名簿導入)やキャリア教育(島を愛し、地元で活躍されている方による教育講演会)の充実を図り、地域に学び、郷土を愛する心を

育て、自己肯定感を高めながら、主体的な学習や望ましい生活習慣を確立し、自立に向かう生徒の育成に努めている。

三 本校独自の活動

(一) 生徒会による「犬田布騒動劇」

例年、文化祭で、地域に伝わる犬田布騒動を劇化して披露している。四月、郷土の先人がどのような思いや時代背景で犬田布騒動と呼ばれる出来事を起こしたのか、校区在住の大先輩から学習し、仲間を見捨てない思いやりの心や行動力などを学び、学習したことを熱い心で演じ、地域から好評を得ている。

(二) 「YOU&Iタイム」でのテーマ学習

総合的な学習の時間で「文化・歴史・産業・生活・環境・健康等」のカテゴリーから八つのコースに分かれ、調べたり、実際に制作や地域で体験したことなどを整理したりして、発表会を実施している。共通テーマは「郷土を知る」ということであり、地域の方々との交流を通して自分の生き方を

考えるよい機会となっている。

(三) 「ジャガイモ栽培」で一体感

生徒・保護者・職員でジャガイモの収穫作業を行う。ジャガイモの栽培を始めたのは平成二十五年度からだ。十一月末に種芋切りを行い、三か月半後の収穫となる。トラクターが掘り返した後の、粘土質の土を払ったり、手で掘り返しながら、地中に残ったジャガイモを探す。ジャガイモの栽培を通して伊仙町の農業について学び、益金は修学旅行・県総体出場補助金などに有効活用している。

(四) 「Self Management Skill Up Week」略してSMS週間の実施

毎月始めに一週間の生活「早寝」「早起き」「朝食」「メディア視聴・勉強」「歩いて登校」の項目について記録させている。生徒の中には、朝食抜きで登校する生徒や寝不足で体調不良を訴え、家庭宅習も定着していない生徒も多く見られる。この週間を設けることで、生徒は自分の生活を見直すことができる。宅習時間は学校だよりに掲載して啓発している。

四 おわりに

キャッチフレーズは「飛翔」である。将来、社会に大きく羽ばたき、たくましく雄飛する生徒を育てるために、進歩を重ねてきた歴史と地域の方々の温かい支援(体育祭で寄付金持参)への感謝を胸に、邁進していきたい。



地域とともに育てる子どもの輝き

木原小(始) 上 鶴 宏 一

一 はじめに

本校区は霧島市の霧島連山の中腹部に位置し、昔は春山牧(はるやままき)と呼ばれる馬牧場であった場所にある。明治十二年に創立され百四十年目を迎える歴史と伝統のある学校である。少子高齢化の影響で地元の子どもの数は減少し、現在は霧島市特認校生制度が導入され、併設型木原小中学校として地域と協力をしながら教育活動に取り組んでいる。地域は教育に関心が高く、常に理解と協力をいただいている。

本校の教育目標は「木原力の育成」である。木原力とは「自分の思いや考えを伝える力」「相手の思いを受け止める力」「協働してよりよいものを目指す力」と位置づけ教育活動を地域とともに実践をしている。

二 地域の中での輝き

(一) あいさつ運動
本校では「あいさつ」は生活の基本であるという考えであいさつ運動を推進している

。「語先後礼」で立ち止まり挨拶をする。「いつでも」・「どこでも」・「誰にでも」元気づく挨拶ができる子どもの育成に取り組んでいる。

昨年から、朝のあいさつ運動を新たに始めた。ボランティアを募り実践している。校区内在住の子どもたちは全員参加している。最近では地域の方々も多く加わり子どもたちに温かい声かけをしていただいている。この言葉が子どもたちの自信と喜びにつながる子どもの笑顔が輝いている。

また、このあいさつ運動の場が地域コミュニティの情報交換の場として活用されている。

(二) 地域の声援

学校行事の運動会や持久走大会時に保護者だけでなく地域の方々にも声援をいただいている。安全面も含め多くの方々にも温かく見守っていただいていることは有り難い。「頑張れ」という言葉に励まされ最後まで

やりきる子どもたちの笑顔はさわやかである。改めて地域全体に見守られていること、一人一人の頑張りを認めていただいていることに感謝申し上げたい。

(三) 茶摘み体験

総合の学習の中でお茶農家の方々にも協力をいただき茶摘み体験をしている。お茶の摘み方やお茶の加工、お茶の流通の仕組みなどを学んでいる。今年新たに地域の方々により「おいしいお茶の入れ方教室」を開いていただき、報道機関でも取り上げられた。茶摘み体験学習のまとめとして子どもたちの考えで、劇をすることになった。台詞を考えたり、インタビューを行ったりと、生き生きと取り組んでいる輝く子どもたちの姿がまぶしく感じる。今年の文化祭(学習発表会)が楽しみである。

三 おわりに

地域と連携した取組は他にも多くあるが、本校のような小規模校にとって、学校行事や特色ある教育活動を進めるに当たり、地域の協力は必要不可欠であり。地域の素材や人材はとても貴重である。「学校と地域」・「保護者と地域」が「信頼と協力」でつながることにより、達成感や自信を得、子どもの笑顔が輝くこととなる。この子どもの輝きが地域の輝きにつながると感じている。



「地域と共に」一人一人を主役に

枕崎高 平井孝俊

一 はじめに

本校は、薩摩半島の最南端「枕崎市」に位置する。大正十四年に枕崎実業高等女学校として開校し、今年で九十六周年を迎えた。

また、平成十年には学科再編により県内初の総合学科が設置され、



今年で二十五年目となる。進学にも就職にも対応できる新しい時代のキャリア教育に組み、「意思の数だけ道がある」というキャッチフレーズを掲げて、幅広い選択科目の中から自分の進路に繋がる科目を選択して学習でき、自分の生き方を探求し進路実現に向けて高校三年間を過ごせる学校である。また、「地域を活性化する人材を育成する」ことをスローガンに、あらゆる学習機会を通して地域連携を図る教育活動の実践を目指している。

二 本校の特色と地域活動

総合学科の特色は将来の進路選択を見据えて、用意された多種多様な教科・科目の中から各生徒が自分の進路にふさわしい選択をし学習することができることである。一年次からはじっくりと自分の将来を考え、二年次から

は文理系列（教養コースと進学コース）とビジネス情報系列の二系列に分かれて自己実現のための学習を行う。特に一年次の「産業社会と人間」や二年次の「総合的な探究の時間」には、社会人講話や上級学校及び職場見学を実施し将来の視野を拡げ、インターンシップ

では現場実習による職業理解及び職業観の醸成に役立っている。三年次の「卒業研究」では、各自が地域や地場産業の現状や課題をテーマに研究・調査を進め、学年末の学習活動発表会でプレゼンテーションを行い、取り組んだ成果を発表している。そのために地元商工会議所とSDGsに関する課題について協働したり、市が主催するイベントに積極的に参加して高校生が地域を知り貢献できるヒントを得たりしている。また、保育園での読み聞かせ・海岸清掃ボランティア・港まつりへの参加など、様々な地域イベントに自ら参加する生徒は多い。

三 生徒一人一人を主役に

本校の喫緊の課題は入学者の確保である。全国的な少子高齢化の加速により入学者の減少が毎年続き、今年度の入学者は一学級のみとなった。本校に限らず、南薩地区及び県内の各地方においては同様の課題に直面している。

しかし、小規模校のメリットは一人一人の生徒に寄り添い丁寧かつ個別指導ができることとであり、生徒に役割を与え様々な体験を通して新しい自分を発見し成長を促せるチャンスであると考えている。



昨年から中学生一日体験入学や各学校行事の企画・進行は可能な限り生徒を前面に出して活躍させ自信をつけさせている。長引く新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、教育活動の制限は学校に大きな混乱を招いた。今年四月、思うような広報活動や地域連携ができない状況にある中、枕崎市が掲げるスポーツによる地域振興策により市営球場の改装が行われた。球場のこけら落としとして、本校と鹿児島水産高校の市内二校による野球部交流試合を開催することになり、全校応援の企画及び準備からセレモニーの進行までを両校の生徒会役員を中心に綿密な打合せの下、開催することができた。交流試合というイベントを通して、両校の生徒たちは大きな感動と達成感を十分に味わえた。

四 おわりに

本校の校長室には、「創立百周年に向けて」信頼と実績の積み重ね 地域に貢献する枕高」という掲示紙が掲げられている。今後も地元自治体や各関係機関の協力支援を得ながら地元の小中学校との連携を深め、魅力的で特色ある教育活動を継続していきたい。



おかげさまで

峰山小(北) 向 井 智 子

一年の締めくくりや行事を終えた時など、節目目で思い浮かぶ詩がある。今から十五年前、当時の教頭先生が作成されていた職員週報に紹介されていた。今でも大事にとつてある。

「おかげさま」

夏が来ると「冬がいい」と言い

冬が来ると「夏がいい」と言う

太ると「痩せたい」と言い

痩せると「太りたい」と言う

忙しいと「暇になりたい」と言い

暇になると「忙しい方がいい」と言う

自分に都合のいい人は

「善い人だ」と言い

自分に都合が悪くなると

「悪い人だ」と言う

衣食住は昔に比べりゃ天国だが
上を見て不平不満の明け暮れ
隣を見て愚痴ばかり
どうして自分を見つめないか
静かに考えてみるがよい

いつたい自分とは何なのか

親のおかげ

先生のおかげ

世間様のおかげの固まりが自分ではないか

つまらぬ自我妄執を捨てて

得手勝手を慎んだら

世の中はきつと明るくなるだろう

「俺が」、「俺が」を捨てて

「おかげさまで」、「おかげさまで」と

暮らしたい。

振り返れば、自分や自分の周囲で起こった出来事の一つ一つを通して、自分なりの成長・成果もあり、反省もある。でも、よくよく考えてみると、すべては周りの支えがあつてこそ。たくさんさんの支えをしっかりと感じ取り、「おかげさまで」と感謝する気持ちを大切にしていきたい。



「自我作古」

新城小(隅) 久木田 昌 之

「あれ?どこかで見えたことあるぞ。」

『鹿児島の教育』を長く愛読されている校長先生方は、この「自我作古」という言葉を御覧になられた時、そう感じたのではないだろうか。実は、この言葉は、『令和二年度鹿児島県の教育八月号』で、石谷小(市)の小正公二校長が寄稿されていたものと同じものだ。私は、この小正校長の寄稿を拝読したときに身が震えるほど興奮したことを昨日のように覚えている。

実は、私が二校目の教頭から三校目に異動する際、その当時にお仕えた校長からいただいた色紙に書かれていたのがこの文字であった。その時、色紙と共に校長からいただいたお言葉は、「この言葉の意味が君にびつたりだと思つた。自分が学校の歴史を創っていく気概を持つてほしい。」と。当時、教頭三校目として大きな学校に赴任する不安でいっぱいだった私は、心からやる気のみなぎつた。

「自我作古」とは、「われよりいにしえをなす」と読み、前人未踏の新しい分野に挑戦し、たとえ困難や試練が待ち受けていても、それに耐えて開拓に当たるといふ、勇気と使命感を表した福沢諭吉が好んで使った言葉である。簡単に言えば、「やりたいことが今なければ、自分が創

り出せばよい」という意味である。新任地では、苦しみ悩むことも多々あったが、いつもこの言葉に自分を奮い立たせた。

もうお分かりであろう。私に「自我作古」の色紙を送ってくださったのは、小正公二校長である。小正校長が、御自分が仕えた校長から受け継いだ大切な言葉を、私に受け継いでくださったのだ。「思い」のリレーを感じ、昨年度の八月号を拝読した際、心が躍ったのである。

昨年度、学校の経営者として現任校を任せられたとき、真っ先に頭に浮かんだのが、この「自我作古」であった。これまでの校長が創造してきてくださった現任校の取組に、さらに私らしい歴史を創造していきたいと、日々努力している。

「表情は人生をつくる」

西陵中(市) 渡 邊 美 佳

先日、奥歯の詰め物がとれたので歯科医院へ行った。いくつになっても歯の治療は苦手である。治療中、気を紛らわそうと思い、壁に貼られているいろいろなものを眺めていたところ、こんな文章に出会った。

口は顔をつくる
顔は表情をつくる

表情は人生をつくる

たった四行の文章ではあるが、いろいろなことを考えさせられた。

マスクをしていても表情はわかるものだ。いつも不機嫌そうな表情をしている人もいれば、いつもここにこと明るい表情をしている人もいる。不機嫌そうな表情の人を見ると自分も何となく暗い気持ちになるし、明るい表情をしている人を見ると何となく明るい気持ちになるから不思議である。自分の表情もそれを見た人の気持ちに少なからず影響を与えるかもしれないと思うと、改めて自分はいつものどんな表情をしているだろうかと振り返り、反省させられた。

そして、数年前に亡くなられたがマルヤガーデنزの社長をされていた玉川恵さんからこんなお話を伺ったことを思い出した。「苦労もたくさんしました。でも、その苦労を顔に出さないように笑顔で過ごしてきました。そのせいか、いろいろな人とご縁ができ、助けていただきました。その方たちのおかげで今の私があるのです。」

まさに「表情が人生をつくった」と言えるのではないだろうか。日々、生活していると、苦しいこともある。つらいこともある。悲しいこともある。

しかし、表情は自分で意識してつくることが出来るのだ。表情を変えると気持ちも変わる。

気持ちが変われば人生も変わるかもしれない。ちょっとつらくても、いや、かなりつらくても、意識して明るい表情をつくって生活しようと思分に言い聞かせる日々である。

我が誠の足らざるを尋ねべし

出水商業高 上ノ町 久

以前、鹿児島女子高等学校に勤務していた時、書道部の生徒に「文化祭で掛け軸に先生の好きな言葉を書いて、展示発表します。」と言われ、迷わず書いてもらった言葉が「人を相手にせず、天を相手にして、己を尽くして人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ねべし」である。

学校という職場は、対生徒、対保護者、対教師と様々な方向に人間関係のラインがある。その中で働いていると、関係性を保っている時はいいが、少しのボタンの掛け違いから、トラブルが発生することがあり、その解決には大変なエネルギーが必要となることがある。それはストレスを抱える原因にもなってしまう。

私は教職生活が三十五年目であるが、様々な人間関係に遭遇してきた。その時に出会ったのが西郷隆盛の冒頭の言葉である。

この言葉を知ってからは、さまざまな出来事

が起こるたびに、自分の誠が足りなかったからこのようにことになったのではないかと、自問自答するようになった。

それまでの自分は、例えば生徒が勉強しないとか、あの保護者はクレーマーだとか、なぜあの先生はあんな対応をするのか、などと考えていた。常に自分は正しく、相手に原因があると置いており、いわゆる不平や不満、愚痴を言っていただけだった。相手や環境を変えることはできないのに。

この言葉に出会い、昔からよく言われる「お天道様は見ている」と重ね、常に自分の行動に邪な思いが無かったか(思無邪)、と考えるようになってから気持ちが楽になった。他人に視点を置くのでなく、自分の誠が足りないからこのような結果になったと考えるようになる、謙虚な気持ちで、誠を尽くし精一杯取り組んでいくことに集中できるようになった。

冒頭の掛け軸はその後生徒からプレゼントされ、今では自宅のリビングに掛けてある。何かあるたびにそちらの方に体を向けて自問自答の日々である。

人を相手にせず 天を相手にして
己を尽くして人を咎めず
我が誠の足らざるを尋ねべし

ある日の校長講話



きつかけは小学校

西出水小(北) 桃 北 紀 和

皆さん、夏休みに大きなスポーツイベントがありますね。知っていますか。そう、東京オリンピックと東京パラリンピックですね。その東京オリンピックに西出水小の卒業生が出場するって知っていますか。四年生以上は領いている人もいますね。だれかな。そう、一山麻緒選手です。正門のところに横断幕が張ってあるの思い出した人もいますよ。

一山選手は西出水小学校時代、水泳をやっていたそうです。特に背泳ぎが得意だったと聞いています。五年生の時に「運動会の短距離走で一位をとりたい。」という気持ちが強くなり、陸上を始めたそうです。

中学生の時、市の陸上競技場で一生懸命練習



しているのを見た高校の監督さんから、「高校生と一緒に練習してみない。」と声をかけられ、一層練習に励んだそうです。

現在はワコールという会社で働きながらマラソンの練習をしていらっしゃいます。その練習はとてもきつくて「鬼メニユ」と言われているそうです。そのおかげで、一山選手は日本第四位の女子マラソン記録をもっています。昨年の名古屋ウイメンズマラソンで優勝しオリンピック選手となりました。

東京は暑いので、日本で涼しいところと言えば・、そう北海道を走ります。女子マラソンは八月七日土曜日の七時スタートです。コロナのためにみんなで一緒に応援することはできませんが、おうちでテレビの前で先輩の走りを応援しましょう。

運動会で一位になりたいという思いがオリンピックまでつながりました。一山選手より速かった友達がいたからこそ、陸上を始めるきっかけになったと思います。皆さんも友達を大事にして、良い意味で競い合って成長してほしいと思います。

温かい言葉で心と心をつなぐ

面縄小(大) 実 岡和 江

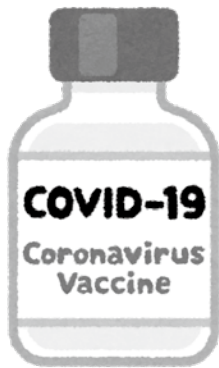
みなさん、おはようございます。梅雨に入り蒸し暑い日が続いています。この時期は、熱中症にも気を付けつつ、コロナウイルス感染症の予防もしなければならぬので大変ですが、自分の体や命を守るために大事なことですので、しっかりと用心していきましょう。

さて、みなさんは今、コロナウイルス感染症対策として、マスクを着けたり手洗いや消毒を徹底したり、人との距離をとるなど感染予防をしながら過ごしています。

本来ならば、マスクをせずに大きな声で歌ったり、友達と手をつないで遊んだり、授業中は友達と近寄って話合いをしたいのだと思いますが、感染症の危険がある今は、人とある程度、距離をとる必要があります。早く感染症が収まって、皆さんが自由に友達と触れ合える日が来るといいなど、皆さんの学習を見てそう思います。今は、人と人の距離はとらなければならぬのですが、心と心は、離れないようにしてほしいと思います。

では、どうしたら心と心は強くつながることができるのでしょうか。

校長先生は「あなたのことが大好き、とても大切に思っていますよ。」という気持ちを込めた温かい言葉を友達にかけていくことが心と心の距離を縮めてくれるのではないかと思います。例えば、あいさつをする時に「花子さん、おはようございます。」と名前を添えて言う、「私にあいさつしてくれているのだな。私のことを気にかけてくれているのだな。」と思い、嬉しくなります。また、友達に、「すごいね。」だけでなく「太郎さん、分かりやすく上手に発表ができてすごいね。」と言うと、言われた人は自信がもてて、さらに嬉しくなります。こういった状況だから、尚更、温かい気持ちを込めた言葉をたくさん使ってお互いの絆を深めてほしいと思います。これからも、温かい言葉がたくさん飛び交う、優しい友達の多い面縄小学校であってほしいと思います。



郷土(ふるさと)を知る

田代中(隅) 新 福 敦 子

田代中の校歌は「私の生まれた(1番)・育つた(2番)・学んだ(3番) ふるさと」という歌詞で始まります。今日は私たちの郷土のことについて話をします。

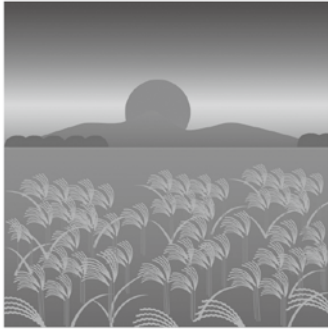
先日、このようなポスターが届きました。

「七月十四日は『県民の日』と書いてあります。鹿児島県が誕生した明治四年の廃藩置県布告日に由来し、三年前に制定されました。郷土の歴史や文化に対する理解と関心を深めてほしいという思いも込められています。この日は、県内の文化施設の入館料が無料だったり関連イベントなどが実施されたりします。錦江町では図書館に明治維新に関する書籍紹介コーナーが設置されるそうです。

校長室に町の歴史に関する資料があります。田代の地名は千年前の書物にも書かれていることや名前の由来、自然豊かで豊富な水があったことから、明治以降多くの開拓者が移住してきたこと、戦後は与論島出身者も移住しており、錦江町と与論町は姉妹盟約を結んでいますことなど、初めて知ることが多く書かれています。皆さんの中には錦江町で実施しているアント

レプレナーシップ事業に参加している人もいますね。役場の方や専門家と一緒に、町内の地域資源を活用した新たな取組を生み出し、地域への愛着や誇りをもつことを願って取り組まれています。これからの時代を担う皆さんが、地域の課題に気付き、課題解決のアイデアを形にして発信することはとても大切な取組です。田代中でも同様の活動をTJK（総合的な学習の時間における自己課題追究）で行っています。

今日は、その中間発表の日です。田代の自然や農畜産物を素材にした新しい物づくり、写真や絵画などの創作、人口減少や防災などの地域課題への提案などの発表があるようです。郷土への想いを再確認するとともに、新たな発想もあるのではないかと楽しみにしています。



趣味を取り戻す

蓬原小(隅)

西留 敦朗

雨天続きの夏休み、自宅の書棚の整理を行った。引越しの時に片付け

所に収納している有様で、捨てられないものである。昔の大事な資料袋の中に教職員採用試験時の願書の下書きが残っていた。懐かしさと、その当時の緊張と不安な気持ちを思い出した。趣味や特技等の記入欄に「映画鑑賞」の文字を見つけた時、ここ十数年映画をじっくりと見ていないことに気付いた。

採用試験当時、映画ブームであった。ゴーストバスターズ・トップガン・グレムリン・ビバリーヒルズコップ・ポリスアカデミー等、作品の時代は前後するが映画館によく通っていた。また、磁気テープもベータ・VHSの商品競走も激しい時代でレンタルビデオの品数も豊富であった。映画ブームで異文化や人間愛・自然環

境・夢の世界・知識、自分の知らない物事や情景から感性を磨くことができた。また、ファッションや持ち物・映画主題歌等の流行も楽しめた。新たな興味も生まれ、夜間教習でバイクの中型免許を取得する等、人生好転となるきっかけもいくつかできた。

時代と共に子育て時は、アニメ映画もよく見た。多くは、家庭や学校でもヒット映画となった。様々なアニメ映画の色彩に感動したり、仕草や表情に笑ったりした。そんな懐かしい「映画鑑賞」を思い出しつつ書棚の整理から、ふと忘れ物をしたような気持ちになった。

いつしか校務でも責任が増えてくると、趣味の映画鑑賞もさっぱりとなくなってしまった。校務文書作成や校庭の草刈り、地域行事や家庭の用事等、趣味が一つ一つと減っていった。

現在は、コロナ禍で感染防止の「不要不急の外出自粛」「密を避ける」「様々な行事やスポーツ観戦の中止」等、家時間が増えた。

早速、テレビで通信会社の映画をサクサクと探して、色々な話題作を十数年ぶりに見ることにした。ストーリーに感動して泣いたり笑ったりすることでコロナ禍の貯まったストレスも発散でき、「映画って本当にいいものですね。」と忘れ物を見つけたことができた。

これからの人生が豊かになるように趣味も大事にしていきたい。

おかあさん、

おかあさん

加世田中(南)

竹崎賢一

昭和四十一年、今から五十四年前の話。愛知県にある中京商業高校(現中京大中京高校)が、甲子園で春夏

連覇を達成した。達成したと言っても、わたしはその頃は一歳の赤ん坊、もちろん直接見たわけではない。小学生になって読んだ「甲子園物語」という本にそう書いてあった。今とは違って投球数制限もなかった時代、エースの加藤投手は、春の選抜大会も夏の選手権大会も一人で投げ抜き、強豪ひしめく甲子園で、見事連覇を成し遂げたのだそう。優勝の興奮、歓喜、そして、ヒーロー加藤投手の優勝インタビュー。誇らしげに、これまでの練習の苦しさや、連覇のプレッシャーが語られるのかと思いきや、加藤投手は、ただただ「おかあさん、おかあさん」と言っていて泣きじゃくったのだそう。インタビューから何を言われても問われても、ただただ「おかあさん、おかあさん」それしか言えなかったのだそう。

親子の間にどんなストーリーがあったのか、それは分からない。でも、長い間、親子で一緒になって、喜びも苦しみも分け合ってきたんだらうなあ、そう思った。おかあさんは、どんな思いでそのインタビューを聞いたのだろうか。

きつとうれしかっただろうなあ。子ども心にもう思い深く感動したのを覚えている。

やがて、わたしも二人の子どもの親になった。子育てについて目標を立てていたわけではないが、漠然と、あの「おかあさん」のようになれたいという思いがあった。甲子園で優勝するとか、そんな偉業じゃなくていいから、子どもが成長していく道のりのどこかで、親の愛を実感して感謝してくれる場面があったら、もう、それだけで十分なんだけどなあ。

学校で、保護者に対して子育てを語る機会がある時には決まってこの話をする。そして、話の終わりにはこう語りかける。「保護者のみなさんは、まさに今、子育て真っ最中。苦労していない家庭なんてどこにもない。だけどいつか、その苦労が笑い話にかわる、子どもが変えてくれる、宝物にしてくれる。そう信じて今日も明日もいっしょに頑張りましょう。今を頑張って乗り越えましょう。」と。



10 km

エイジシュート

江内中(北)

大山裕章

日課のジョギングをしながらふと、「10 km エイジシュート」の考えが浮かんだ。元々はゴルフ

の「エイジシュート」。年齢より少ない打数で1ラウンド18ホールを回ることをいう。規定打数が72であるから、エイジシュートはホールインワンと同じように、達成し難く、憧れのものであるらしい。ゴルフのことはよく知らないが……。これになぞらえて、10 kmを年齢(分)より短い時間で走ることを「10 km エイジシュート」と勝手に名付けた。

本来なら多くの市民ランナーが目指しているサブフォーを目標にすればいい。しかし、各大会が軒並み中止になった今、走るこの意味を見失いつつあるのは否めない。

はからずも、この目標はすこぶる具合がいい。ゴルフのそれとは違い、遠い夢ではなく、手頃な指標である。何よりアスリートの気分に合わせてくれる(東京二〇二〇の男子一万mを二十七分四十三秒で制したバレーガは二十一歳。女子一万mでは二十八歳のハッサンが二十九分五十五秒で金メダルを手に入れている。先日非公式ながらフルで人類初の二時間切りを達成した現チャンピオンはどうだろうか。)おそらく

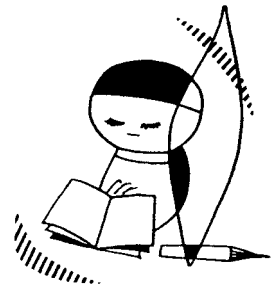
あと二十年はつきあつていける目安だ。

素人ランナーに大事な動機付け。若い者には負けられない、と冗談交じりによく言うが、「10 km」に関していえば、それは戯れ言や負け惜しみではなく本気の言葉である。トップアスリートと同等に、タイムを競う。中高生には達成すべくもないと声高に言うこともできる。だがそれは、クリアできなかったときに加齢による衰えを言い訳にできないということでもある。

敵は自分自身——、ニーチェではないがそう思う。「10 km」を目標にして、生活の在り方に気を配るようになった。相変わらず毎日である家呑みも、過ぎず、過ぎず。体重の増減や効果的で無理のない筋トレに、そして、一日や一年間の計画にも気を遣うようになる。初当選だった鹿児島マラソンが中止になり、黄色のビニール袋が増えなくなって二年が過ぎた。コロナに暮らしの在り様が制限される日々だが、稲穂の揺らぎを横目に一人で走っている時はコロナから一番遠いところにいる。

さて、学校では地区駅伝大会に向けての練習が本格化してきた。若い者には負けられない。(今夏の思いの総まとめを段落の頭に据えて)

読書案内



■木村素子 工藤勇一 合田哲雄 著

「学校の未来はここから始まる」

八幡小(市) 下古立

浩

「コロナ禍による一斉休校は、学校とは何かを冷静になって捉え直すうえで、私もよい機会だったと思います。」と木村は語る。

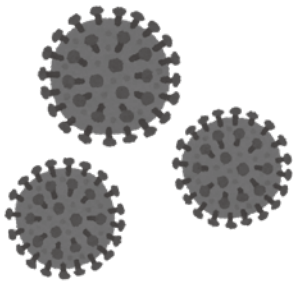
新型コロナウイルス感染症により、学習は、教室で教師の指導の下に、全員で学ぶものという学校の常識が大きく崩れた。

コロナ禍の状況は、私たちに学校が最低限果たすべき役割とは何かを考える機会となった。その結果、学校はこれだけはしなければならぬいと重要性を再確認したものがあつた一方、必要かどうか迷うものもあつたのではないだろうか。確かに「学校とは何かを冷静になって捉え直す」機会となつたのだろう。

本書のタイトルの「ここから始まる」の「ここ」とは、コロナ禍の状況下に加えて、学習指導要領の全面实施、ギガスクール構想、個別最適な学びなど教育改革の波が来ている「今」を指しているのではないかと考える。

本書では、これからの教育、学校の在り方、教職員の姿について、学校改革の実践者である木村、工藤に文科省で教育改革に取り組んできた合田の三人による座談会での議論を一冊にまとめたものである。「今」こそ、現在の教育を見つめ、これからの教育について考える好機ではないだろうか。本書は、筆者たちの知見に学び、そして、新しい視点を得られる一冊であると思われる。

教育開発研究所 一八〇〇円



DXの思考法

西野小(熊) 霜 田 さおり

この春、赴任先が分かったとき、最初にしたことは、「南種子町立西野小」のインターネット検索である。特に、某有名ソーシャルメディアは、数度検索すると、同じワードを基に、瞬時に個別最適だと判断した動画を薦めてくる。そのため、まだ見ぬ西野小の子供たちの様子や伝統芸能をはじめとする地域の特色を、時と場所を越えて知ることができた。加えて、本町教育長の迫力ある動画まで薦めてきたときには、「デジタル技術の底力を見た気がした。その教育長が、学校経営初陣の私に熱く語ってくださいました。」とさまざまな立場から示されている策の羅列ではなく、一歩先の学校経営を」と。実に、動画以上の迫力であった。

夏になり、手にした本書には、その第一章に次のように記されている。

どんなにきれいな戦略を描いても、それを実行できる組織能力がなければ、まさに画餅に終わる。

筆者は、組織の能力を高めるために必要なことは、課題や事象の根底にあるロジックを個人と組織に刻み込むことであり、その際に、具体ではなく抽象化する発想が鍵となるという。この発想は、授業づくりにおいて、一教材で学んだことを、抽象化し、他教材や他教科等の学びにどう生かすか(生きるか)を考えるとどこにも似ているのではなからうか。また、その入り口で、創り手視点からユーザー視点への転換の重要性も述べており、創り手を「教師」に、ユーザーを「児童生徒」に読み替えれば、まさに授業づくり求められることである。

コロナ禍において、時代の急速な変化を実感した今だからこそ、本書は、学校が「一歩先」へ進むための足がかりとなる一冊なのかもしれない。

文藝春秋 一六五〇円



52ヘルツのクジラたち

知名小(大) 井手 英 男

読書好きな方は、どんなジャンルでも挑戦できるが、普通の方は、ジャンルや作者に偏りが出てくるものである。私も偏りのあった一人である。しかし、校長職となり、子どもたちや職員にもたくさんの方の良書の紹介をするためにたくさんの方の本を読むようになった。良書の見分けの指標として、『本屋大賞』に選ばれた作品に挑戦するようにしている。今年の本屋大賞に選ばれた作品を紹介したい。

この物語の中には、保護者による繰り返される児童虐待や孤独にLGBTで悩んでいる登場人物の心情が生々しく描かれており、これからの学校運営に関わるヒントとなる要素も含まれているものであった。

児童虐待を受けた主人公貴瑚が、同じく母親から虐待を受け、ムシと呼ばれ言葉も失った子ども愛(いとし)と偶然にも出会い、何もかもに絶望し逃げてきていた主人公が、自身の過去を振り返りながら、手を取り合い、誰にも届かない52ヘルツのクジラの歌声に導かれ、二人を

助けてくれる魂の番という出会いを発見できた話であった。とにかく、読んでいる間は、ずっと重苦しく辛い読み物だったが、最後に、少年愛の実祖母との出会いによる希望の光が52ヘルツのクジラの歌声に導かれたもので良かった。

ラストの下りで、「これからわたしたちは、どんなことがあったって頑張れるよ。だって、離れていても声を聞いて、声を聞かせてくれる人がいると知って：。」とあり、身近な人や子どもたちの中にも、「52ヘルツのSOS」を出している人がいるかもしれない。そんな人の声を聞ける人でありたいと思えるようになった自分に驚いた。クジラの夢を見て愛を助けに行く所までは、一気に読み上げ涙が溢れた。色々な事を考えさせられる一冊だった。二期期の始業式に子どもたちにも紹介した。みなさんもうかがえよう。

中央公論新社 一七六〇円



■神代健彦 著

「生存競争」^{サブタイトル}教育への反抗

土橋中(日) 井之上 良一

ネットで話題になっていくことを知り、何気なく手にした本である。帯には、「クラス全員を『小さな起業家』に育てる教育。．．．．．正気ですか?」と、刺激的なキャッチコピーが書かれている。

著者は、日本の教育の現況について、市場、国家、地域共同体、家族それぞれが様々な要求をしているが、過剰な期待に引き裂かれた教育がうまく機能するとは思えないと、問題を提起する。そして、教育をもっと「ゆるくする」ことが必要だと主張する。

教えたからといって、その分だけ子どもが育つということはないし、逆に教えたつもりがなくても、子どもの方が勝手に学んでいるということはよくある。つまり、教育には不確定性がつきものである。だから、社会の側からの要求を教育の側が簡単に請け負うことなどできないという。とりわけ、子どもの能力を強化し、そのことによって様々な社会問題を解決するということが一般については、教育に期待すべ

きでないし、社会問題の解決は社会全体で行うべきだと指摘する。例えば、貧困・格差問題の解決は焦眉だが、それには再配分のシステムを工夫することが先だというわけである。

要するに、教育に期待すべきことは「子どもを世界と出会わせる」ことに帰結するという。

著者自身が、教育学者による「反教育的」な奇異な本であると述べていることから想像できるとおり、これからの教育の在り方を考える上で、新しい視点を提供してくれる本である。

また、先行研究の成果を駆使しながら各論が展開されているので説得力があり、近代日本の教育を俯瞰できるという意味でも参考になる本である。

集英社新書 八六〇円



鹿兒島は桜島に代表されるように活火山の県である。その火山の恵みにより、県内どの地域においても身近に温泉がある。全国区として霧島と指宿は知れ渡っているが、それ以外にも鹿兒島は素晴らしい温泉の多い温泉大国であり、その温泉を愉しまないのは勿体ない。趣味と言えるかどうかは別として、人の心と体を癒やし、日本人の豊かな感性とともに文化として親しまれてきた温泉の魅力や愉しみ方についてふれたい。

まずは、温泉の魅力である。敢えて魅力は語らずとも理解している、という声が聞こえてきそうであるが、その一つ目は、何と言っても温泉による心と体の健康効果である。古くから、日本には湯治という言葉があるように、健康増進や病を治し人々を癒やしてきた。年を重ね、仕事の精神的な負担や疲労は、体調にも大きな影響を及ぼす年代である。そんな心と体に、温泉はリフレッシュ効果があるとともに、元氣とやる気を引き出してくれる処方箋である。事実、温泉の成分が人体に浸透することでホルモン分泌の促進と、交感神経が刺激されることにより体の機能が回復されると言う。病は氣からと言われるが、熱いお湯又はぬるま湯に入ることの効果は大きい。また、アンチエイジング効果として温泉には細胞の錆をとって活性化させる還元力があるとき、若返りの期待があるのも魅力に他ならない。

二つ目は、源泉数や温泉地数の多さである。車に乗って走るたびに温泉の看板を目にするほど点在している。温泉の源泉数は大分県に次いで

趣味・文芸

温泉の魅力や愉しみ方について

宮小(市) 郷原光徳

で全国二番目であり、温泉地数も上位に入る。そのため、海の温泉、山の温泉、川の温泉、離島の温泉、砂蒸し温泉等々、場所によって多様にあり、その違いが味わえる。何より、その多くの温泉が源泉かけ流しを謳い、有名温泉地に行かずとも日常的に温泉にふれられる環境にあることが素晴らしい。また、源泉数の多さは泉質とも関係し、その成分は同じ温泉地でも少しずつ違いがある。泉質の効能も様々な上、色、におい、音、肌触りなど五感で味わうのも魅力である。そんな魅力のある温泉が、財布にも優しく贅沢に愉しめるのは、鹿兒島の温泉ならで

ろにも影響しているのではないだろうか。まだまだ魅力多い温泉ではあるが、ここで自分なりの温泉の愉しみ方を少しだけ語りたい。ご多分にもれず、愉しみ方といえば何より温泉巡りである。温泉セットを車に積み、情報を仕入れ温泉を愉しんでいる。泉質や効能の違いによる温泉を愉しむもよし、絶景や秘湯を探して愉しむのもよし。時には、なかなか泊まれそうにない高級旅館の日帰り温泉を試すのも素晴らしい。鹿兒島ならではの愉しみ方には、郷土の偉人、西郷さんが愛した温泉地巡りも面白い。西郷さんが温泉好きであったことは広く知られて

はである。

三つ目の魅力は、温泉地を中心とした街の風景や四季、自然を含めて愉しめることである。温泉に入ることを目的にするだけでなく、その周辺の街並みを歩いて季節を感じたり、名物や観光スポットを探したりすることにより旅行気分が味わえ、何かしら新鮮な愉しさを感じる事ができる。これは転地効果と言われ、普段の生活から違う環境に身を置くことにより心身が刺激され体にもよい影響を与えるようだ。様々な温泉地を訪れることは、普段とは少し違った非日常を味わえることになり、体調や気分を整えて新たな活力を与えるものである。日本人の感性と温泉の文化の関係には、このようなこと

しているが、霧島、指宿、桜島、薩摩川内市等々を巡り、西郷さんの人となりを想像し親しみが増す気がする。なお、温泉巡りの入浴にあたっては、じっくりと温泉の泉質を愉しむようにしている。まずは、かけ湯を繰り返して体温を高め、湯があふれ出る湯じりから入り、次第に源泉が出る湯口の方へ向かい、その変化を愉しんでいる。温度の違いはもちろん、肌を感じる感触が明らかに違うことに気付くことで愉しさも更に膨らんでいる。

現在、世界中が目に見えないウイルスの驚異にさらされ、長期的な対応が求められている状況の中、学校でも持続的な子どもたちの学びを保障するために、感染のリスクを軽減しながら教育を進めている。その対応にあたり、校長職の重責は計り知れないものであるが、こんなときこそ、自身の健康と活力等を高め教育に邁進するために、温泉を活用するのいかがかと思う。



夢を紡ぎ

未来を織りなす

龍郷の教育

大勝小(大) 前田 浩之

一 大島紬発祥の地

世界自然遺産登録に湧く奄美大島であるが、伝統産業にも世界に誇れるものがある。イランのペルシャ絨毯・フランスのゴブラン織りと並ぶ世界三大織物の一つ大島紬である。本校のある龍郷町は、その大島紬の発祥の地といわれ、特に薩摩藩の統治時代に生まれたと言われる「龍郷柄」は、同じく龍郷町秋名集落の名を冠した「秋名バラ」と同様に大島紬の代表的な緋文様であり、役場の庁舎の外壁には二つの柄のパネルが装飾されている。

二 大島紬の歴史と今

一六〇九年に薩摩藩が侵攻してくるまでは奄美群島は琉球王朝の支配下にあり、奄美の紬も琉球紬としての扱いだっただ。以降は染めの技術や緋の技術が独自の発達を遂げる。明治には商品化が始まり、産業の近代化の波にも乗り、県全体で製造販売が行われるなど鹿児島県の大産業となった。しかし、日本人の呉服離れや多くの工程に熟練の技術が必要

な職人の高齢化などから紬従事者が減少し、現在、本場大島紬の生産反数はピーク時の一〇二%に過ぎない。

三 夢を紡ぎ 未来を織りなす

大島紬は、先に糸を染め、経たての緋糸と緯よこの緋糸、そして無地の地糸を交互に織り合わせていくことで世界一緻密な文様を作り上げる。龍郷町教育のキャッチフレーズ「夢を紡ぎ 未来を織りなす 龍郷の教育」は大島紬をモチーフにし、未来への道を経糸に、住民の繋がりを緯糸に、町民の団結と未来志向を打ち出したものだ。実際に龍郷町の住みやすさは、新築の家が次々に建ち、毎年人口が増え続けるという現状が示しているが、流入人口が増え、多様性が増し、各集落の伝統行事への住民参加率が低下するなどの課題が出てきている。

四 東京の泰明小学校と染めの交流

本校は、東京の銀座で呉服店を経営している卒業生の繋がりで、銀座にある泰明小学校と「染めの交流」を行っている。子どもたちはタブレットを駆使しながら学校の紹介動画を作成し、交流の前に送る。泰明小の子どもたちは銀座のブランドショップを紹介し、本校の子どもたちは世界に誇る大自然を自慢する。自己肯定感を醸成しながらも、まだ見ぬ土地に憧れを抱く。

その後、奄美から大島紬の泥染め用の泥を送り、泰明小では銀座の柳の染料、本校はシャリンバイの染料とでハンカチを染め、その様子をオンラインで映しながら交流する。染めの指導者は数少ない若手の紬従事者であ

る。同じ泥を使いながらも、染料による色の違いに感動しながら、ゲームの話やスポーツの話など、賑やかに交流する。製作したハンカチもお互いに贈り合う。今年で四回目となる。大島紬の産地と消費地の学校の交流でもある。

五 経営者として

大島紬には誰の作品というのではない、三十分から四十の工程にそれぞれ熟練の職人がいる。その中のただ一人が欠けたとしても、大島紬はできない。技術はもちろん、工程に携わる全ての職人ができ上がりをイメージし、高い集中力で専門性を生かし作り上げる。世界一細かい図柄の大島紬は、製品という未来を思い、職人同士の繋がりで完成されるのだ。私は本校の卒業生である。奄美の大自然と遊び、大島紬が私を大学まで行かせてくれ、教職に就かせてくれたと思っている。父が大島紬の織り元をしていたのだ。

中学校まで泥染めや原料糸の糊張りなど、複雑な製造工程の一部も手伝い、父と織り工宅を訪れ、自宅に隣接した作業場には緋糸に色をつける職人もいた。当時は製造工程の全体像を理解しておらず、ただ言われたことをこなし、作業を眺めるだけだった。

校長の職に就き、父の仕事を思う。織り元として、多くの職人とどう接し、どう経営していたのだろうか。職員に高い専門性を育てながら、未来を担う子どもたちの教育にあたる学校の経営者としての職責を今更ながら感じるところである。

*** こころの詩 ***

万葉集を読む

秋の七草とは、ハギ、ススキ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウの、七つの「花」です。

万葉集の八巻に、山上憶良が詠んだ和歌が二首あるのにもなっていて、後に広く知られるようになりました。

秋の野に 咲きたる花を 指折り

かき数ふれば 七種の花

萩の花 尾花 葛花 なでしこの花

女郎花 また藤袴 朝貌の花

内容は、「秋の野原で花を数えたらいい花が七種あったよ。これとこれと……」という、とても純朴で幸せそうなもの。

この二つの歌が広く愛され、世に広まったといったようです。

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○新任 令和三年十月一日付

西之表市 佐藤 秀 正 氏

(前山下小学校長)

○新任 令和三年十月一日付

知名町 田 中 幸太郎 氏

(前妙円寺小学校長)

○再任 令和三年十月一日付

和泊町 竹下 安 秀 氏

季節の言葉 「濁り酒」

山里や杉の葉釣りにごり酒 一茶

もろみを漉していない白濁した酒。清酒よりも味が濃厚で野趣にあふれている。

その歴史は古く、三世紀後半の『魏志倭人伝』には倭人は酒を嗜むといった記述がある。

編集

後記



二十四の瞳ではないですが、自転車通勤しています。道すがら自動車からでは分りにくい四季折々の自然を感じながら通っています。この頃、民家の庭先の柿の実が熟れ、虫の音が大きく奏でられています。甲突川の水面を見ると、清く澄んでコイの泳ぐ姿が見える日もあれば、水嵩が増し、茶色く濁っている日もあります。

徒然草には、「春暮れて後、夏になり、夏果てて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の間もよほし、夏より既に秋はかよひ……」(第一五五段)とあります。春のうちにやがて来る夏の兆しがあり、夏から既にそこはかとなく秋の気配があるのです。そう言えば、柿の実も夏のうちから青々と実がなり始め、大きくなってきていました。甲突川の濁りも、前日までの降雨が影響しています。また、新型コロナウイルス感染症にしても、これまでSARS、MERSなど呼吸器疾患が前兆と言えるかもしれせん。万物の全ては、次への予兆を秘めながら推移しているのです。

子どもの成長も親や教師がはつきりと気づかないうちに、予兆を秘めつつ成長し、変容していくのでしょうか。

予兆と言ってもなんとなく感じるものから中々分りにくいものまで様々です。

長引くコロナ禍、秋の学校行事等の在り方については、自然界の予兆、児童や教師の心の兆候などを感じ取る鋭い観察眼や感受性をもって、判断していきたいものです。

最後に御多用の中、玉稿をお寄せいただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

穂園 正幸(原良小学校)